強迫性障害の認知行動療法の教育方法の確立とスーパービジョンの方法論の開発に関する研究

研究分担者　中川彰子　千葉大学大学院医学研究院子どものこころの発達研究センター 教授

- 研究要旨：認知行動療法（CBT）はセロトニン再取り込阻害剤と並んで強迫性障害（OCD）に対する有効な治療法としてその効果が実証されている。しかし、CBT の先進国でも有効な治療を提供できる治療者が不足している。我が国の状況はより深刻であり、治療者育成のためのトレーニングプログラムの開発と効果の実証が求められている。そこで、本研究では、昨年度の本研究により開発した強迫性障害への認知行動療法の治療者の訓練の方法とその治療効果を検討する。

研究協力者
浅野憲一：　千葉大学大学院医学院研究院子どものこころの発達研究センター　助教
中谷江利子　：若久病院、千葉大学非常勤講師
磯村香代子：カロリンスカ研究所 postdoctoral researcher、　千葉大学非常勤講師

A. 研究目的： OCD に対する CBT の治験経験の浅い治療者がスーパービジョンを受けながら行う治療の効果を検証し、OCD に特化した CBT 治療者への有用な訓練方法について検討する。

B.研究方法：

対象患者：千葉大学医学部附属病院は CBT 外来を受診し、SCID により OCD と診断された患者のうち、年齢 18 歳から 50 歳、Y-BOCS（Yale-Brown Obsessive-Compulsive Sale）総得点が 17 点以上、WAIS-III による FIQ が 80 点以上のものとした。ただし、脳器質疾患、精神病圏内、重篤な内科疾患、薬物、アルコール依存のあるものは除外した。
効果判定には Y-BOCS 総得点の変化をプライマリーアウトカムとした。
尚、本研究は千葉大学医学部の倫理委員会に承認を受けており、本研究の説明を受け、書面にて同意を得たものを対象患者とした。

治療者：
千葉大学では認知行動療法の研修コースを設けているが、その研修生、および修了生のへうち、その研修の一環として OCD の治療の訓練を希望したもの

治療方法：
スーパーバイザーによるアセスメントにより、診断、および治療適応が確認されたのち、治療者により、週 1 回 50 分の CBT を 12～20 回施行する。その後、1,3,6,12,か月後のフォローアップを行う。治療者は週 1 回のグループまたは個人でのスーパービジョン（SV）を受けながら治療を実施するものとした。

評価尺度：
・Y-BOCS　：強迫症状重症度スケール　半構造化面接　（プライマリーアウトカム）
・OCI（Obsessive-Compulsive Inventory）
　：強迫症状自記式スケール
・PHQ-9（Patient Health Qujikiestionnair -9）　：自記式抑うつスケール

・GAD－7（Generalized Anxiety Disorder 7－item ）：自記式不安スケール
・AQ(Autism Quotient)：自記式自閉症傾向スケール

C. 結果

本研究は現在継続中であるので、途中経過として報告する。

これまでに 16 名の患者（男性 9 名、女性 7 名、平均年齢：38.7±8.5 歳）が治療終了している。
治療者は臨床心理士 5 名と看護師 1 名で、いずれも OCD に対して SV を受けながら CBT を実施した症例数は 4 例以下(平均 2.5 例：0～4 例）であった。

強迫症状の重症度はメインアウトカムである Y-BOCS の総得点が平均で 24.75(5.23)点から 16.62(6.28)点へと有意に減少した
(p < .01, g = 1.37, 95%CI 0.59 – 2.16; d =1.41, 95%CI 0.6 – 2.21)。自記式の強迫症状のスケールである OCI は平均で 75.18(30.92)点から 44,06(28.41)点へと有意に減少した（p < .01, g = 1.02, 95%CI 0.27 – 1.77)。

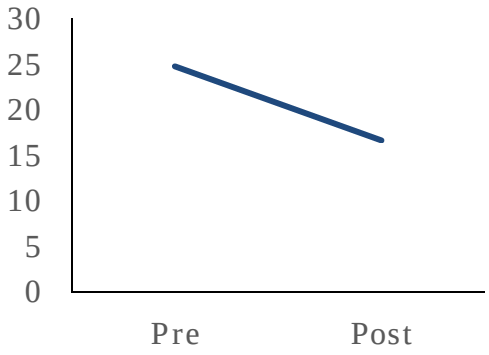

Figure 1　Y-BOCS 得点の変化

抑うつの自記式スケールである PHQ-9 は治療前から高くなかったが、11.37(6.60) 点から 8.68(5.86)点へと減少したが、治療前後で有意差は見られなかった(p = .10, g = 0.42, 95%CI -0.29 – 1.13)。
不安自記式スケールである GAD－7 は 11.12(5.87)点から 6.37(5.43)点へと有意に減少した(p < .01, g = 0.82, 95%CI 0.08 – 1.55)。
途中経過なので、患者のプロフィールについての詳細は最終報告時に呈示するが、大学病院の CBT 専門外来ということもあり、難治な患者が紹介されることが多いため、発達傾向の強い患者の頻度が高く、AQ でカットオフ値の 33 点を超えたものが 8 名、そうでないものが 7 名であったが、治療効果には群間で差がなかった。

D. 考察

本研究の結果から、スーパーバイズ下における OCD に対する CBT の有効性が示された。最近の国外での無作為割り付け試験のみを集めたメタアナリシスによると、効果量 g=1.39 であり（Olatunji,2013)、非対照研究のメタアナリシスの結果では効果量 d=1,32 と報告され（Stewart & Chambless,2009）ている。これと比較して本研究のこれまでの効果量（g=1,37, d=1.41）は、OCD に対する CBT の治療経験の浅い治療者であっても、我々が開発した定期的なＳＶを提供することで、国外と同等の治療効果を得ることができることを示している。さらに、近年、OCD の難治化の要因の一つとして自閉症スペクトラムの併存が言われているが、SV を受けながらでもあっても CBT の治療効果は自閉傾向に影響を受けないことを示唆しており、今後さらに症例を増やし、また自閉症スペクトラムに対する世界的なゴールデンスタンダードである評価方法を用いて検討を進める必要がある。

一方、本研究では曜日の関係もあり、グループSVに参加するものと個人SVに参加するもの、両方に参加したものとがみられた。今後は、SVの様式による治療効果、訓練効果の差などについても検討を重ねると同時にスーパーバイジーの感想等を参考に、治療のプロトコールや治療者のトレーニングプログラムを洗練してゆく必要がある。また、OCD に有効なCBTを提供できる治療者を増やすためにも、ワークショップの開催に続くSV等のプログラムの作成やオンラインGSVとオフラインGSVによる比較試験等におけるエビデンスの蓄積も有用であろう。

E. 結論

未だ途中経過ではあるが、CBTの治療経験が浅い治療者であっても、SVを受けながら我々の訓練プログラムにもとづく治療を行えば、OCDに対して、国外の報告と同等の治療効果を得られることが示唆された。

F.健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

１．論文発表

１）Yoshinaga N, Hayashi Y, Yamazaki Y, Moriuchi K, Doi M, Zhou M, Asano K, Shimada M, Nakagawa A, Iyo M, Yamamoto M. Development of Nursing Guidelines for Inpatients with Obsessive-Compulsive Disorder in Line with the Progress of Cognitive Behavioral Therapy: A Practical Report. Journal of Depression and Anxiety 3(2): ,1000153. 2014

２）松澤大輔, 中川彰子【自閉症の分子基盤】強迫と自閉. 分子精神医学, .14(2), 104-111, 2014

３）中里道子, 中川彰子, 清水栄司. 英国の留学事情-モーズレイ病院, 精神医学研究所における研修を経て-特集Ⅱ 海外に留学する研究者からみた, その国の留学事情-わが国との研究, 医療状況などにおける比較- 精神科 25(2): 167-172, 2014.

２．学会発表

１）Nakagawa A, Hirano Y, Kobayashi T, Miyata H, Matsumoto J, Asano K, Matsumoto K, Nemoto K, Masuda Y, Nakazato M, Shimizu E. Correlation between regional gray matter volume and autistic traits in obsessive-compulsive disorder (OCD). 44th European Association for Behavioural and Cognitive Therapies Congress, The Hague,2014.9

2) Hirose M, Hirano Y, Nemoto K, Sutoh C, Miyata H, Matsumoto J, Nakazato M, Asano K, Shimizu E, Nakagawa A. Relationship between regional gray matter volume and symptom dimension in obsessive compulsive disorder (OCD) 44th Annual Congress of The European Association for Behavioural and Cognitive Therapies Den Hagg, Netherlands Hague, 2014.9

3) 中川彰子： 「強迫性障害の認知行動療法―経験の浅い治療者の治療経過から学ぶ」第40回日本認知・行動療法学会研修会 富山,2014.11

４）廣瀬素久、平野好幸、浅野憲一、松本淳子、宮田はる子、須藤千尋、中里道子、根本清貴、清水栄司、中川彰子. 強迫性障害にお

ける症状ディメンジョンと脳の 形態との関連. 第 41 回日本脳科学会大会. 福井. 2014.11

５） 小林智子、平野好幸、根本清貴、須藤千尋、宮田はる子、松本淳子、浅野憲一、中里道子、清水栄司、中川彰子. 強迫性障害における自閉傾向と脳の形態との関 連. 第 41 回日本脳科学会大会. 福井. 2014.11

H.知的財産権の出願・登録状況

１．特許取得　該当なし
２．実用新案登録　該当なし
３．その他　該当なし